氏　　名　黒田末寿（くろだすえひさ）

学位の種類　理学博士

学位記番号　理博第683号

学位授与の日付　昭和56年3月23日

学位授与の要件　学位規則第5条第1項該当

研究科・専攻　理学研究科動物学専攻

学位論文題目　Sociological Study of the Pygmy Chimpanzees
（ピグミーチンパンジーの社会学的研究）

論文調査委員　（主査）教授 池田次郎　教授 河合雅雄　教授 日高敏隆

論文内容の要旨

申請論文は2篇からなるが，いずれもピグミーチンパンジーを対象とし，その社会ならびに社会行動を明らかにしようとしたものである。ピグミーチンパンジー *Pan paniscus* は，チンパンジー *P. troglodytes* の1亜種と考えられていたが，1933年，クーリッジによって独立した種として記載された。その際クーリッジは，本種の形態学的諸特性が幼児的であり，これがアフリカの類人猿の共通先祖に近いのではないかと示唆しているが，申請者は本論文の中で，グルーピング・パターンと社会行動の分析を通じて，クーリッジが提起した課題を追求しようとしている。

第1論文では，この種の流動性に富んだ遊動集団の様相を，そのサイズ，構成，集団内の個体の空間的配置等から求めている。ピグミーチンパンジーの遊動集団のサイズはチンパンジーのそれよりも大きく，確認しえた147遊動集団の平均頭数は16.9頭であった。またその多くは，オス，メス，子供からなる混成のグループで，これが全体の80%を占めている。集団中のオスとメスの性比は，集団のサイズにかかわらず常に1対1に近い値をとる。チンパンジーでは，オスだけからなる集団が普通に見られるが，ピグミーチンパンジーがこのような集団をつくることはほとんどなく，オスはメスたちの中に分散し混入する傾向が顕著に認められた。これらの遊動集団は，常に離合集散を繰り返しながら，固有の遊動域をもつ一つの地縁集団に包摂されていることが明らかにされている。

第2論文では，社会行動の記載と分析の結果が述べられ，チンパンジーとの比較が試みられている。まず，激しい攻撃行動の出現頻度は，チンパンジーのそれに比してきわめて低く，全観察期間を通じて56例が見られたにすぎず，しかもその約半数はオス・メス間に起きたものであった。一つのネストを2頭で共有する例や，食物の分配行動などは，チンパンジーより高頻度で観察されており，またメスとメスが，食物の物乞いや緊張の緩和を求めるような状況で，互いの性器をすり合せるという特異な行動が認められている。また，毛づくろいの頻度から個体間の親和度を求めると，オス・メス間，メス・メス間，オス・オス間の順に親和性が高いという結果がえられ，これはチンパンジーのオス・オス間，オス・メス間，メス

・メス間という順とはきわめて対照的であるといえる。

以上，申請者はピグミーチンパンジーが，社会や行動の面から見ても性差が少なく，また幼児的特性を温存しているという結論に到達している。

論文審査の結果の要旨

ピグミーチンパンジーは，アフリカの類人猿の中でその生態や社会が未知のままに残された種であるが，申請者らが行ってきた野外調査により，1970年代の半ばになって，チンパンジーやゴリラと比較しうる資料がようやく提出されるに至った。申請論文2篇は，その社会と生態をはじめて明るみに出したものとして，歴史的な意義をもっている。

申請論文の基礎となっている諸資料は，チンパンジーやゴリラの研究における初期段階で得られた諸結果との比較に耐える十分な知見を数多く含んでおり，本種の社会および行動上の特性がよく描き出されている。申請者によって明らかにされた本種の社会学的な特性のうち，遊動集団のサイズも，単位集団と考えられるもののサイズも，ともにチンパンジーのそれより大きく，これら集団内の性比は常に1対1に近く，またオスの集団がほとんど見られないという指摘などは，チンパンジーとの相違を明確にしたものとして注目に価する。社会的行動に関しても，この種の特異な行動が数多く記載されているが，親和関係におけるチンパンジーとの顕著な相違などと併せ，両種の系統関係を考察する上での重要な論拠を提出したものとして高く評価される。

申請者は，これらの結果を通じて，本種の性差が形態的のみならず行動の上から見ても小さいこと，また本種が示す行動上の諸特性の多くが幼児的といってよく，それはクーリッジが形態的な観察から本種がペドモーフィックな特性を残しているとした指摘に符合すると結論している。このような理由から，本種をアフリカ類人猿の祖型に近いとする仮説を立証するには，今後まだ各研究分野における成果が出そろう必要があるが，社会，行動面からの重要な問題提起として評価されてよい。

よって本論文は，理学博士の学位論文として価値あるものと認める。